

平成22年度耕作放棄地再生利用実証ほ場実績報告書（実証結果）

地域協議会名 魚津地域担い手育成総合支援協議会
 取組主体名 (農)NAセンター

1 目的

耕作放棄地となっている農地を再生し、新規作物の導入を推進するに当たり、対象地に適した作物の選定と土壌改良方法及び栽培方法を検証する。

2 実証ほの内容

(1) ほ場の概要

- ① 所在地 魚津市大字大海寺野村 2580 番 1 外 28 筆
- ② 面積 実測 9,651 m² (公簿 7,842 m²)
- ③ 地目 田
- ④ 耕作放置期間 約 30 年間放棄 径 6cm 以上の灌木の有無 有
- ⑤ 土壌条件 土性 GL (埴壤土) pH 5.9~6.3
- ⑥ 特記事項 竹の繁茂

(2) 実証試験の耕種概要

- ① 作物名等 ソバ 品種名 信濃1号
 作物選定理由 市内でこれまで栽培、出荷されていない品目
新たな機械等の整備が不要で栽培できる品目
地域の土壌等に適する作物であるかを検証すること適当である品目

② 再生作業年月日 平成22年3月1日～平成22年8月10日

③ 試験区の設定

試験区	播種方法	苦土石灰施用	基肥施用量 (kg/10a)	播種量 (kg/10a)
A	ドリル	200kg/10a 施用	N:2.0、P:3.0、K:3.0	4.2 (目標 3~4)
B	散播	200kg/10a 施用	N:2.0、P:3.0、K:3.0	5.5 (目標 5~6)
C	ドリル	なし	N:2.0、P:3.0、K:3.0	7.2 (目標 3~4)
D	散播	なし	N:2.0、P:3.0、K:3.0	5.5 (目標 5~6)

④ 播種時期 平成22年8月19日～20日

⑤ 栽植密度等 160本/m²程度

⑥ 使用した農業機械 トラクタ、ブロードキャスター、動力散布機、播種機、コンバイン

⑦ 管理作業等 収穫：平成22年11月6日

⑧ 年次スケジュール

年次	実証ほ場設置・運営の内容
平成21年度	再生作業
平成22年度	再生作業、実証ほ場の設置・調査（土壌改良方法及び播種方法の実証）

3 調査項目（調査結果）

① 生育調査結果

試験区	苗立数 (本/m ²) 9/9 調査	主茎長 (cm)		倒伏程度 10/27 調査
		9/21	10/27	
A	160	67.9	68.7	微
B	160	70.1	70.7	無
C	160	66.8	71.5	無
D	160	63.2	64.8	微

② 収量調査結果（害虫による食害が甚大であったため参考値）

試験区	全重 (風乾物) (kg/10a)	茎重 (風乾物) (kg/10a)	子実重 (風乾物) (kg/10a)	子実千粒重 (風乾物) (g/千粒)	容積重 (風乾物) (g/L)
A	164	63	75	23.9	490
B	142	52	63	23.3	491
C	98	42	42	23.9	484
D	151	65	63	23.0	471



開花期頃（9月17日）の生育状況

4 実証ほの実施の推進体制

- ① (農)NAセンターが取り組み主体となり、魚津市担い手育成総合支援協議会からの指導・支援を受けて実証ほ場を設置、運営する。
- ② (農)NAセンターは、耕作放棄地所有者から利用権設定を受け、魚津市担い手育成総合支援協議会からの実証ほ場の設置、運営に係る委託を受ける。
- ③ 新川農林振興センターは、関係機関と連携しながら、実証ほ場における栽培指導を行うとともに、調査結果とりまとめに協力する。

5 結果のまとめと考察

- ・ 出芽～開花期頃の生育状況はいずれの区も良好であり、試験区Dで主茎長がやや短い傾向があるものの、播種方法の違いおよび苦土石灰施用の有無による大きな差はみられなかった。
- ・ 全試験区とも10月中旬頃、葉が害虫の食害を受け、正常な登熟を迎えることができなかった。このことから全体的に、収量（坪刈調査）は42～75kg/10aと低く、千粒重および容積重も小さかった。このため、試験処理の違いによる収量・品質への影響を適切に評価することは困難であった。
- ・ 出芽・苗立ち～開花期頃の生育状況をみると、今回の試験では石灰資材施用の有無による大きな差は認められなかったが、元々の土壌pHが基準レベル程度（6前後）に確保されていたことが一因として考えられる。また、播種方法に関しては、ドリル播種および散播ともに良好に生育が確保されており、どちらを選択しても問題はないと考えられた。
- ・ 生産物（ソバ）の販売に関しては、新たに販路を開拓する必要があり、今後継続して栽培を行うに当たっては安定的な取引先の確保が課題となる。